

# 小学校教員とスクールカウンセラーはいかに協働しているか

○松本久香<sup>1</sup>・山本 力<sup>2</sup>

(<sup>1</sup>就実大学大学院教育学研究科・<sup>2</sup>就実大学大学院)

## 問題と目的

2014年文科省から「チーム学校」の答申が出され、スクールカウンセラー（以下 SC）は中学校に加えて全小学校にも配置される方針が示され、学校でも他職種協働の時代が始まった。中学校教員と SC の協働に関しては、山本(2012)、吉村(2012)の先行研究がある。このような潮流において既に配置されている小学校教員と SC はいかに協働を模索しているのであろうか。双方に面接調査を行い、各々の視座からその実態と課題を明らかにすることを目的とした。

## 方法

【協力者】A 県の小学校勤務の教員 6 名、及び別な小学校に勤務する SC 4 名、計 10 名を対象。

【調査時期】2015 年 10 月～2016 年 4 月に 1 名当たり 1～1.5 時間程度の半構造化面接を実施。

【調査内容】質問紙(性別、年齢、教員経験・臨床経験など)による予備調査。その後、インフォームド・コンセントを受けた上で「印象に残る一事例」を語ってもらい、協働の具体的なプロセス、及び主観的な思いや課題を聴取した。

【分析方法】グラウンデッド・セオリー・アプローチを援用し、10 名の逐語記録を基に段階的に抽象度の高い上位カテゴリの生成を行った。

## 結果

(生成概念に基づくストーリーのみ記載)

### 1. 教員の視座からの協働

教員は新参の SC を遠くから伺う\*。以前の SC 経験の記憶や評判に囚われ、期待や評価を左右する。SC を活用する際には協働以前に必要なと思われるステップを踏むので協働速度は遅れがちである。協働に当たっては養護教諭が実際上のハブの役割を果たすことが多く、まずは情報共有が協働の要となる。協働では、双方の専門性と立場の

違いを前提として会話を重ねる。しかし、週 1 の短時間勤務など制度上の枠に直面して協働が妨げられがちである。うまく機能すれば、SC は保護者と子どもに働きかけて教育環境を安定させ、専門性を発揮して教員の後方支援も行い、教育相談に寄与することができる。

### 2. SC の視座からの協働

SC は赴任してもすぐには専門性が発揮できる場を与えてもらえず、何かと働きづらさを感じている。そのような状況で協働の素地づくりとして、校内のさまざまな場面で情報収集し、キーパーソンを探し求める。協働の前提として依頼主の教員がイニシアティブをとりつつ、対等な立場で意見を出し合うことが重要と考えている。「事例」の共有と協働を通して、教員との信頼関係が築かれ、学校も変容する。SC も専門性と立場の違いを前提として会話を重ねることの意義を認めている。コンサルテーションは関係性の中で成立すること、問題発見・未然防止につながる情報連携の必要性を協働から学んでいる。

\*下線部はカテゴリ・グループやカテゴリとして生成された概念である。

## 考察

- (1) 学校に「入る側 (SC)」と「受け入れ側 (教員)」の意識の差が大前提として存在している。
- (2) 当初教員は SC 活用に戸惑い、SC も居心地の悪さを感じ教員からの声がかかりを待っている。
- (3) 教員は校内で合意形成した後 SC につなぐ。他方、早期介入を望む SC と意識の差が発生している。
- (4) 小学校では教員と児童との結びつきが強く、担任は距離を測りながら SC につないでいる。
- (5) 協働の「成功体験」は、教員の意識と学校の体制を変容させ、さらなる協働を促進する。